特集・身近なまちづくり❹

座談会・生活課題から地域課題へ

求められる地域拠点とは

加藤和彦・川向雅弘・松本和子・本間淳子・田代七男

一――身近なまちの中で
二――地域に無数のたまり場を
三――地域施設の課題
四――ふところの深い地域を

一――身近なまちの中で

田代　きょうは、子供や老人、障害者などにかかわりながら、手づくりのまちづくり活動をされて来たベテランの方々にお集まりいただき、活動の豊かな経験をいろいろお話しいただくことにしました。身近なまちづくりの活動は、市民が主役になって公的な援助も加わって進められて行くのが理想と思いますが、今年度から、身近な地域施設もたくさん建設され始めますし、それらも含めて、公的なセクションに投げかけられる課題も考えてみたいと思っております。

松本さんは、相当長いですよね。

自主保育から地域給食の会まで

松本　はい。戸塚区に、十七、八年前に建ったドリームハイツという高層住宅がありまして、世帯数が二千三百戸ぐらいで、まとまりやすく、いろいろな活動が活発に続いている地域なんです。私がかかわっているのは、すぎのこ会という幼児教室で、十六年前に自主保育というか、自分たちで幼稚園をつくって、それが今まで続いています。私はそこの保育者として、設立当初からかかわっていたのですが、昨年の三月で保育者はやめました。それから、一昨年から準備を始めていた地域給食の会というのがありまして、老人だけに限らず、病気のときとか障害を持った人とかに給食サービスができればということで始めた地域給食の会のメンバーでもあります。また、水曜の会といいまして、それは障害を持った子が地域の中で親子ともども孤立しないようにということで、地域の子供とか親とかと交流できるように、

座談会出席者

加藤和彦（地域作業所「であいの里」事務局長）
川向雅弘（瀬谷区社会福祉協議会職員）
松本和子（幼児教室すぎのこ会元保育者、地域給食の会代表、地域の集い主催）
本間淳子（後谷自治会市電文庫、つたのは学園、十日市場老人昼食会、ボランティア）
司会・田代七男（ボランティア協会事業推進課長）

松本さん

毎週水曜日の午後、遊びの場を持って、それと同時に月一回ぐらい学習会をしています。

それと五年前から地域の集いを始めました。文庫活動とか、幼児教室とか、学童とか、いろいろなグループが子供のために活動しているんですけれども、それがなかなか横につながれなかったのを呼びかけまして、年に一回、学校の先生とか地域外の人も含めて、老人会にも呼びかけて百人規模ぐらいの大きな集いをやり、隔月に二、三十人規模の小さな集いをやって地域の掘り起こしみたいなことをやっております。

もう一つ、ありんこというかわいい名前のサークルがあるんですが、これは三年ぐらい前からかしら、三歳ぐらいまでの子供たちがどういう育ちをしているのか、がわからない、孤立している親がいるんじゃないかということで呼びかけましたら、ゼロ歳から三歳までの親子がどっと集まってきました。それでこれは月に二回ですけれども、親子で遊ぼうという会をつくりました。すぎのこのOBのお母さんたちが中心になって、この会をやっています。

鍵のない地域作業所

加藤　私は、戸塚区上倉田町の自宅の庭にであいの里という地域作業所を建設し、そこの事務局長をしています。昭和五十八年から地域の中で理解活動を進めながら、六十一年に発足させました。横浜市民生局の補助事業の一つです。設立の動機というのは、地元の方の福祉の状況から見て、更生レベルの利用施設が少ないということで、ぜひともつくろうと。これに当たっては他の活動ホームの方々とも話し合いまして、線路のこちら側にも必要というのも一つ設立の動機にございました。

私の住んでいます地域は、変わり方が非常に早くて、ほとんど田んぼと山であったような地区が、高度成長期に開発されて住宅地に変化し、地域住民の質も変わってきました。ですから、私どもが子供のころは親のかかわりというのが意外と強く、他人の子も平気でしかるというのがしょっちゅうありましたが、今は、隣は何をする人ぞということで全然関係なくなりました。そういう中で自分も子供を持つ親として、子供が育つ環境だとか、住みやすい地域をつくっていこうというふうな思いがありまして、いったい何から取りかかっていいのかということが課題だったんです。たまたま私の方の専門の仕事を生かせるという、行政による制度がございますので、その制度を生かして、小さな作業所をつくりました。

当然、いろいろな方たちが利用なさっているわけですけれども、うちの作業所は入り口には鍵がありません。ですから、地域で一人暮らしの精神薄弱の老人の方が土・日は休みなんですけれども、自由に使ってテレビを見て、ウインドーショッピングができる時間ぐらいまでは自由に過ごして、どこかへ行く。そういう意味では自由に使える場所を提供しているというのが一つあります。

私自身は、今精神薄弱児の更生施設の職員ですが、その前は、柏尾町にある保育園に四年勤務していまして、そこで障害児の担当をしていました。その子供たちが、もう高等部にかかってきまして、卒業後の進路のことで、またいろいろとつながりを持つようになりまして、「作業所

であいの里、にぎやかに昼食

に入れてください」という親の希望もあり、もっと質の高い、法的な機関を今、行政とともにつくろうと思っております。

私は、最大限利用できるものは最大限利用してしまおうと思っており、足りない制度や物的なものについては、何とかしよう、できなければ、どこかから探してくるというふうなやり方でやっていますけれども、とにかく必要なニーズに適応するような動き方をしていこうというのがモットーです。

市電文庫から自治会館の建設へ

本間　肩書きが「主婦」だけです。子供を二人生んだ後、資格も収入もゼロで二十数年来ております。

私たちの住んでいるところは、緑区十日市場の二十年前に開発された一戸建ての分譲地で、五百世帯ぐらいの自治会を作っています。この地価の値上がりの中で、いつの間にかワンルームマンションができるようなことがぽこぽこ起こり出しているんです。いずれ私たちの住んでいるところは年寄りばかりか、それともワンルームマンションの林立になるか。

今、建築協定の問題とかで小さな土地の五百世帯がかなり揺れ動いておりますけれども、何とかまとまる方向に行けばいいなということを抱えながらやっております。

この分譲地が開発された当初は、文庫活動や自治会館の建設活動に参加し、その後、地区センターのコミュニティ・ボランティアをしたり、老人給食や障害者施設のボランティアもしておりますが、私は、いつも主婦という肩書で、何かあったら機動力になれればいいな、さっと動ける存在でいたいと思っております。

田代　市電の文庫には、初めからかかわっていらっしゃるんですね。

本間　はい、市電が公園に払い下げられたのは、十七年前です。それまで、自治会の施設がなくて、公園で青空会議をしていましたが、市の方に青少年センターとしてなら、と言うことで払い下げてもらいました。自治会の大人の会議に使っていたのですが、子供たちにも使わせてもらいたいということで始めたのが電車の中での文庫だったんです。最初、会員の本を寄附してもらって、電車の中も、お父さんたちに集まってもらって本棚をつくってもらったり、全部手づくりで、とにかく自分たちでだれも当てにしないでやろうというので、やっていることはかなり小さなことばかりなんですけれども。

それがずうっと続いてきたおかげで、自治会館をつくろうということになったときに、市の方が市民運動が続いているならということで、分譲地の一番外れの三角形の小さな土地なんですけれども、借りることができました。私たちは公園法というんですか、あれのために七年、八年さんざん苦労したんですね。公園の中に子供たちもお年寄りも全部集まれる施設を何でつくっちゃいけないんだという思いがありまして、結局、公園にそういう集会の施設がつくれなくて、代替地を借りることになった訳です。銀行から八百万円借り入れて、あとは、自分たちで積み立てて、千二百万円の建物だったんですけれども、今も毎月の返済をしているんですね。自治会館をご覧になられたかたたちは、びっくりして帰って行かれるんですけれども、素晴らしい建物です。

本間さん

田代　つくっていくプロセスのお話は、また後で伺いたいと思いますが、では、ただ一人のプロパーですけれども、川向さん。

二――地域に無数のたまり場を

川向　瀬谷区の社会福祉協議会に勤めています。私がこういう仕事をするきっかけは、寿町で、アルコールの問題だとか、学校に行っていない子供たちの問題とか、精神障害者の

問題だとか、そういうところにずうっとかかわってきて、現在でも仕事以外でそういった自分の活動はしているんです。

たまり場活動

瀬谷では、ぼけのお年寄りのボランティアさんを中心にしたデイサービスみたいなものから広がって、地域でぼけのお年寄りだけではなくて、車椅子の人もそうだし、普通の妊婦さんとか、子育て中のお母さんとか、子供だとか、例えば精神にハンディを持っている人だとか、おどおどとした普通の中年の人の集まる〝たまり場〟みたいな活動をたくさんつくってきたんです。

その中で私がずうっとこだわってきたことは、例えばたまり場であるんだから名簿とかはつくらない、リーダーもつくらない、ボランティアもいない、来た人が主役で〝する〟とか〝される〟とかいう立場を置くのではなくて、来た人がいればいい、その場にその人がいればいい、その役割だけでいいということを通してきたんです。ただ、瀬谷にはたまたま施設が少なくて、老人ホームも少なくて、そういう中だからこそ、福祉事務所も我々も保健所も一緒に頑張ってやってこれたというのがあるんだけれども、ちょっと頑張ってきちゃったから、いろいろな調査だとか、地域ケアシステムだとか、在宅支援センターもそうなんですけれども、全部白羽の矢が立っていて、その中で自分がやってきた仕事が自分たちの本意と違うところで変わってきている、という感じはしてます。

加藤　いわゆるたまり場という活動を、今なさっているわけですか。

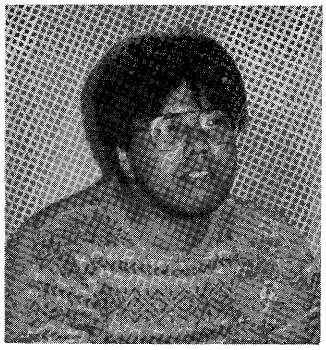
川向　ええ、今、五年目かな。ただ、社協職員は私だけだから、非常に大変で、送迎なんかもボランティアさんを含めて、車でやっているんだけれども、八カ所くらいですけれども。

加藤　運営主体が社協ですか。

たまり場の雰囲気づくり

川向　運営自体は地域のものにしたいのだけれども、なかなかそういう雰囲気づくりができなくてね。だれもが受け入れられる雰囲気というのは難しいですよね。例えば、私たちがつくった子育てグループというのは、だれでも受け入れられる。お母さんが精神分裂の人でも受け入れてもらえる。例えば老人クラブだとかゲートボールなんかで一番最初に除け者にされるのは、ぼけてきたお年寄りだし、子供の母親グループなんかで一番受け入れられない人は、「あの人、ちょっと変よね」という人でしょう。だから、そういうものがない雰囲気をつくっていく、私がいなくなっても、かかわっている保健婦さんがいなくなっても、ずうっとその場に、そういう雰囲気だけは続いていけるというのは物すごく難しいですよね。だから、私達は、ただ、その雰囲気づくりのためにいるんだと思っているし、それが私たちの仕事なんだと、自分で納得できているけど、例えば今まで専門、プロといわれた人たちは、何かしないと気が済まないし、不安なんですね。だから雰囲気づくりのためにいるとかいうのが理屈ではわかっても、体がそうではなくて、いろいろ指導したり、いきなり血圧をはかったりするわけだけれども、その辺のかかわる側の問題をいつも抱えつつも、でもやっぱり……

川向さん



加藤　例えば運営資金だか、建物というのはどうしているんですか。……

川向　建物は自治会館を借りてやっています。だからお葬式が出ちゃうとだめになっちゃう。

加藤　安定したたまり場ではないですね。

川向　そうなんです。ただ、安定したたまり場ではないけれども、人の拠点にはなりつつある。

加藤　資金は。

川向　資金は全部社協で出しています。

田代　住民の意識というのは大事ね。ハードの部分よりも、住民に認知されているということは、すごく大事ですね。

加藤　でも、川向さんがいなくなるとポシャるということはないですか。

川向　いや、あるかもしれませんね。

加藤　そういうふうないいものを長期に継続していきたいという願いがあるときに、僕は逆に一つの形にしたい方なんです。それを自分の趣味の範囲で、自己満足の域でやっていてはいけないんじゃないかと思う部分があるわけです。

川向　確かにそうですよね。私もつないでいこうという気が全くないわけではなくて、私だけでかかわっているわけではないから、保健所のケースワーカーと保健婦と……

加藤　社協自体がかかわっているというのはうれしい話ですね。社協のやる仕事も、我々住民とか、活動をしている者から出たものによって、ある程度プログラミングしてくれればよいけれども、今、逆行しているでしょう。プログラムが先行していて、それに乗せられる感じが非常に多くなってきていると思う。そういう意味で自主的に活動している、こういう小さな活動にもうちょっと光を当ててくれるという行政視点があっていいと思うんです。

川向　僕なんか人の拠点、場の拠点ということで定着するには十年、十五年ぐらいの時間がかかるというふうに最初から思っているんだけれども、こういったおどおどした活動だけれども、結構二、三年前は、社協の中でモデル的な地域活動としてあったんだけれども、ここにきて、在宅福祉サービスという具体的なサービスを、提供しないと社協じゃないみたいな。瀬谷でやっているような活動は地道で、例えば在宅福祉サービスのヘルパーさんだとか、そういう問題の基本的前提になる地域づくりみたいな、そういう活動だと思うんだけれども。

加藤　今のたまり場という言葉を僕は大好きなんだけれども、たまり場からのいろいろな発展が多分あったんじゃないかと思うんですけれども。

川向　つくっていこうよといい始めたのはもみじの会といって、ぼけのお年寄りを集めて、一日ぼけのお年寄りと家族に時間をとってもらう。そういう活動があったんです。そこの人たちが、送迎なんてしなくても、地域で手を引いて、「あの人だったら近いから、車がなくても手を引いてそこへ行けるわ、みたいな、そういう集まりがあればいいね」というところから地域に広がって……。

田代　それが一番基本なんでしょうね。障害を持っているとか、ぼけ老人がいるとか、動き出すもとみたいなものがあって、だれかがいい出せば手伝う、いい出せばわかるという人がいると思うんです。何かいい出したときに一つの方向性みたいなものが生まれてきて、膨らんでいく。

加藤　多分いろいろな市民層があって、自分たちで拠点をつくって活動をはなからやるというタイプの活動の仕方と、一つの既存の活動母体の中に参加をしてやるという形があると思うんだけれども、後者の方が一般的ですね。今は主婦層ですね。子供さんに手があいたころの主婦の方たちが非常なパワーで活動なさっていると思います。

ゆりかごから、今度は墓場の部分を本間　私は週に一回、緑区の長津田駅の近くにある重度の知恵おくれのお子さんのためのつたのは学園で朝から夕方まで一緒に作業をしているんです。でも、そこのかかわり方は、もう七年か八年になりますけれども、職員の方たちとはさりげなく、いるかいないかわからないような存在でいようという接し方をしているんです。そのかわり園生仲間にしてもらえている、という自信も持ってはいるんですけれども。できることなら空気のような、そこに私が居ても当然と周りから認識されるような、主婦のボランティアをいつもいつも模索しています。

　私たちの住んでいるところは、だんだん年寄りが多くなっていくし、私自身も自治会館を一生懸命つくった一人ですし、おっしゃっているようなたまり場のようなものをつくっ

ていきたいと思うんですけれど、私自身の体力がなくなっていくから、結局、体力のなくなっていく分、行政に助けてもらわなければならない部分が当然出てくると思うんです。だから、その道をつけるようなことをしていきたいなと。そうすると、せっかく自治会館という建物がありますから、老人給食のできるような、火力の強いコンロに切りかえたいですし。例えばうちの方で会館をつくる時にいろいろな方の能力とか何かをストックしていまして、働きかけて、実際に老人体操を週に一、二回やってもらったりしていたんです。それもボランティアでなんですけれども、結局、長続きしないんです。ただし、ちょっと先にある地区センターでの体操教室には行かれないような足の痛いお年寄りが、引きずりながらでも自治会館には来てくれるんです。わあわあおしゃべりの方が多い体操になりますけれども、そういうことが二年ぐらいは続いたんです。せっかく、老人体操を二年もやってくれたのだから、地区センターの方で老人体操の講師をやったらということで、地区センターに推薦したら、すぐ取り上げられたんですね。でも更衣室で倒れた人が出たりとか年寄りが集まってくることの繁雑さでなくなってしまったんですね。地区センターでも、年寄りはオミットなんですよね。だから、何のための地区センターなのかなとちょっと思いました。私自身も自治会館をつくっていながら、揺りかごから墓場までの墓場の部分が地区センターにもないですし、自治会館にもないということを、ちょっと何とかしていかなくてはいけないなと……。

田代　自治会館には、活動の場としての機能を持たせたいという、例えば子供たちが集まるたまり場であったり、老人がそこで運動をする場所であったりする活動の場というような意識を持って運営していらっしゃるわけですね。

地域は障害を持った人々とか、子供とか、高齢者の方をどこまで受け入れられるのか、というところで、その辺、松本さんは老人まで広げてしまっているでしょう。

歩くコミュニティ・センターがいっぱい

松本　私つくづくこのごろ感じるのは、地域というのは子供と、お年寄りと、障害を持った人たちにとってすごく必要なんですね。青年とか、中年、壮年は自分の行動力がありますけれども、ほんとにお年寄りとかかわって改めて地域というのはすごく大事だなと。

私もたまり場という言葉が大好きで、何か得体が知れなくてエネルギーを秘めたようなたまり場というのがあって、それでいて「いらっしゃい」と呼ばれたのではなくて、自分からたまっていくような。私たちの場合は、逆に場所がなくて、歩くコミュニティーセンターがいっぱいいるんです（笑）。だけど、老人とか、障害を持った人たちというのは、みずからたまれないんですね。場所とか、そういうものの用意がないと出てこられないということで、今、私たちは早く器がほしい。あとの口出しは要らないから、と切実に思っていろいろなところにお願いしています。

それから、やっぱり人づくり、川向さんみたいな公的な人だと、いっそう、いろいろな場所を使ってできるという強みが感じられるんですけれども。ドリームハイツの場合は、自主保育の中で育つお母さんたちの力はすごいんです。お金の管理も全部やるわ、肉体労働もやるわ、とことんほんとに自主的な運営をやっていますから総合活動なんです。毎日話し合いばかりやって、話すこととか、書くこととか、考えることとか、うんと訓練されますし、やっぱり自分からやるから、ほんとに子供と同じで身につくのだなと思うんです。そこを出たお母さんたちが地域の中でばらばらになりながら、いろいろなところで活動をして広がっているという状況なんです。そういう人たちがいるということが、歩くコミュニティーセンターがいっぱいいるということなんですけれどもね。

田代　たまり場というところは、皆さん、一応共通の感覚を持っていらっ

しゃる。活動していると、たまり場みたいなのが必要で、そういうのがいい。決められて、何か四角いものしか入れないというのでは困る。

普通の人達の力のすごさ

川向　瀬谷でやっている活動の中でいつも驚かされるんですけれども、特に精神の障害をもつ人の場合、今まで彼らがいる場所は病院か、作業所だとか、かかわりとしては保健所の生活教室といわれているものですけれども、そういう中でいつも指導される立場にあるわけです。瀬谷でやっているたまり場みたいなところに出てきたときに、「私、このごろほんとに寝られない」というようなことをその人がいうわけだけれども、僕なんかがそういう話を聞くと、薬を飲んでいないのでないかとか、状態が悪いんじゃないかとか、家で何かあったんじゃないかとか、頭の中にそういう考え方がポッとよぎっていくのだけど、「あら、私もそうよ」と返されてしまう。その力は物すごいですね。自分だけではないんだと、ほっとできる。そういうふうに少しずつほっとしていく場というか、もっといえば、普通の自分を取り戻していく場に、そういうおどおどとした普通の人たちがかかわってくれることというのは、その人にとって物すごく大きいですね。

瀬谷のたまり場の人々

三――地域施設の課題

田代　今、場所ということに限定してみると、たまり場という発想が出てきたのだけれども、逆に病院の場というのを老人は積極的に使っているのではないかと思うの。午前中の老人の体操教室にはだれも来なくなってしまう。「病院へ行ってごらんなさい」というので行ったら、ほんとにいらっしゃる。そこに何となく集まってきて、サロン風なんですよ。

松本　やはり名目みたいなのが一つあると集まりやすいというのがありますよね。どこかが悪いとか体操をするとか。

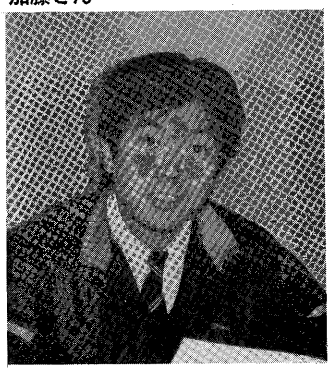
本間　それと何の何子さん、何の何夫さんという自分を個として接してもらえるということが、今のお年寄りというのは病院につながってしまうのだなと思うんですね。

田代　実はこの間泉区の子供会とか、老人会とか、いろいろなグループの代表が集まって研修会をやったんです。そして、僕がおもしろかったのは、そこで私がお話をちょっとして、その後分科会になった。僕のそばにいたグループは老人クラブの人たちなんです。その人たちに一番どこへ行きたいといったら、やっぱりここの自治会館だというの。ここが一番いいと。何か老人を引きつけるたまり場みたいなものがあるのだろうと思います。僕は「近くの地区センターもここと同じだよ。きれいでいいじゃないか」といったら、「嫌だ」というんですね。距離的には余り違わないんですけれど、そうすると、老人にとって施設というのは一体何だろうか。

建設時に地域ニーズのくみ取りを

加藤　地区センターは、個という対象で受けてくれることは、まずないでしょう。地域の団体、町内会だとか自治会だとかのニーズに合わせて設立をしていますよね。でも、ベースにいる住民というのは、個のニーズを持っていますよね。ですから、個のニーズに合ったプログラムが地区センターの中に、最初からはないわけです。自主的に活用する活動力が老人の方にどれだけあるかというのは非常に疑問だと思うんです。だから、設立時に十分に地域ニーズというものを検討して、もっと高度なニーズに適応できるような場所に転

加藤さん



換していってもらいたいですね。

公的施設建設の際に、地域のニーズを行政側がどれだけ受けて建物をつくっているかによって、かなり解消すると思うんですよね。我々住民に公表される前に、プログラムが全部引かれてしまって、我々が入る余地は全くないんですよ。

松本　ほんとに強く感じます。行政側がどういう道筋で制度とか施設とかつくっていくのか、私たちに知らされていないから、ほんとに住民のためにつくってくれているのかなと感じるんです。

例えば、今度近くにできた公園も、住民の意思を聞いたというんです。それは町内会長とかの意見を聞いて、住民の意思を反映したということですんでいるんだと思うんです。道路でも施設でもこれからきっと住民の意思を聞くとかいうことが、大事にされていくと思うんですけれども、どの辺を住民ととらえるかで違って来る。今までのところは、在宅介護で苦労している主婦とか、家族の意見は、集約されてないと思う。

田代　そういう不満というのは、学校建設なんかでもあるみたいですね。この間、ある学校へ行って、PTAの会長に会ったんです。自分の学区のことなのに、会長さんの意見を一番最後に聞くというのは何事だといって、僕に訴えていましたけれども、施設のつくり方の中に、そういうのがちょっとあるんじゃないか。初めから終わりのところまでは専門家がどんどんつくってしまうわけですね。でき上がって、これ以上動かせないというところへ来て、パッという。だから鳥小屋の位置や入り口さえも変えてくれない。だから、でき上がって、子供がこっちから入るよというと、そのとおり子供たちは最後に自分で道をつくっちゃった。

加藤　非常に使いにくいですね。

田代　行政としても形ができないと、説明できないというのはわかるけれども。それはそれとして、今度はつくってしまったのだから、修正していくということはできないか。

行政も地域へ出てきてほしい。

松本　一方では、施設ができるときに、それだけを聞くんじゃなくて、ふだんからどのぐらい地域のいろいろな活動なり、要求なりが行政の方に入っているか、本当は向こうからつかみに来てほしいんですけれども、ともかく足を運んで、その地域にどういう特殊性や活動や必要性があるかというのを、ふだんからつかんでいるといいものができると思うんです。田代さんとか、よく出てこられる方はあるんですけれども。

田代　機関とか、団体とか、施設からの情報は、仕事の内容もしっかりしていますから、電話一本で取れるんです。だけどグループでやっているところはなかなか情報が取れないんです。実は、青少年文化活動センターができるまで三年間の余裕がありますから、どうか歩かせてくれと。

編集部　ボランティア協会とか社会福祉協議会というのは、そういう出歩くという役割を持っているんでしょうね。

川向　そうでしょう。

田代　だけど、委託事務の仕事がすごく多くなるに従って、処理を早く効果的に、格好よくと、そういうことが前面にでてきちゃう。個かグループが主体という言葉が消えてくる。

地域施設の機能を生かすには

田代　現在、たまり場的ないい関係が地域の中にあるわけですね。これから子供や老人の施設が細かい単位で建設されて来るときに、貸し館みたいになるのか、各ボランティアグループなどの拠点として頼っていけるところになるのか。施設にどういう機能を持たせるかというのは課題ですね。

川向　瀬谷区にも在宅支援センターができるのですが。年寄りも子供もみんなそうだけど、多分何もないの

が一番使いやすいですよね。そう思いませんか。ただ部屋があるだけでいいと思うんだけれども。

加藤　例えば、住民の方から入浴を希望している場合というのは、ただ箱では何にもならないでしょう。僕は、理念的にはいいものをねらっているんじゃないかと思うんだけど。たまり場という場所と、利用できるある程度のサービスは併設されていなければ、多目的な場所にはならないんじゃないかと思うんです。

川向　そうですけれども、いろいろなサービスがあっても、利用されないものになる可能性もあるんです。例えば、区内に一つ老人ホームができたり、精神病院ができるのですが、ほとんど老人が入るということになると、在宅を支えるというセンターの機能がどのように生きて来るか。たとえば、送迎の方法ですけれども、僕たちは、今までの活動の実践で、ドアからドアまでの送迎をやらないと、絶対に利用できないというのがわかってきた。例えば一カ所にみんな集まって、そこに送迎バスが来ますよではだめなんです。そこまでやるかやらないかというのは、我々のやり方で随分違ってくる問題だと思うけれども、難しいですよね……。

施設が主張してないと寄り付かない

田代　加藤さんがいった施設が主張していないと人が来ないのではないか。ここは老人ですよとか、学校ですよとか、何か主張していないと、寄りつかないのではないか。自治会館の運営の難しさというのは、どの辺にあるんでしょうか。

本間　私たちは物理的なことが大きいんですね。坂を登り切ったところにあることと、それから小さな五十坪単位の住宅地の中にあるものですから、周りの住民が葬式は絶対にあげてもらいたくないとか。しかも、突き当たりなものですから車が入らないとか。今、使っているのは長寿会と、市電文庫と、あとは自治会の定例会、それ以外は無人状態になってきてしまっている。私たちもそろそろ腰を上げなければいけないんじゃないかなというところにいるのですが。

あともう一つ、地区センターにこだわるんですけれども、私の住んでいるところの二つの地区センターは重度の知恵おくれの人たちの施設と併設されているんです。一方は一年中交流があるんですね。同じ屋根の下に玄関が一つありますし、それから私のように週一回ボランティアで園生と一緒に作業したりというような。もう一つの方は屋根が別になっていることもあって、ふだんの交流が全然ないんですね。やっぱり建物は造りや運営によってこんなに違うのかと……。

田代　専門の建物というのは、これからある程度要求されてくるんじゃないか。例えば、老人だけ、子供だけでいる時間があっていい。特性の違いが生きる部分と、一緒になれる部分というのが二つあると思うのね。

もっと柔軟な運営をできないか

松本　同じ建物の中に、私はいろいろな要素が入っていていいと思うんですね。通りすがりに障害者の人と出会ったり、子供の声が聞こえてきたりとか、いつも同じところにごちゃ混ぜにいるということではなくて、でも、必要があれば交流ができるということで、そのところもいつもこのことに使わなければいけないという場所ではなくて、必要に応じてつくり変えられるというか、使いかえられる。そういうところと、厨房なんていうのは何もなしでは困るのですから、きちっとそういう形があって、それでいて時の流れとともに変わる要素がありますね。地域は子供が多い時代と、高齢者が多くなる時代と流れていくから、私は余り目的別の分野別というか、そういう施設だけがたくさんできることは、税金のむだ使いじゃないかと思うんです。今、土地がなくて、なかなかつくってもらえないわけでしょう。だから、ほんとに希少価値のある土地だったら、いろいろなものが含まれる施設をつくってほしいと思っているんです。

田代　なるほどね。建物も、運営のされ方ももっと柔軟にならないか、

と言うことですね、この間地区センターを使っている人の話を聞いていたら、何で食事をさせないの、というのね。第一、我々が仲間に触れ合うときに、食べるものを通して案外仲間づくりができるんじゃないのか。ここだけは食事してもいい、自炊してもいいというような形でつくればいいのになといっていた人がいましたけれども。

市民と行政の共同作業を

松本　どの施設も同じ顔触れの運営委員ですよね。行政は、今までの組織にのっとってやっている。もっと住民の層を広げるべきではないですか。

自治会、町内会という組織ではないところで活動しているいろいろなグループがありますでしょう。その人たちの意見を聞く機会を設けてほしいし、そこに、もっと直の援助とかがほしい、と思いますね。

加藤　行政の職員の中に信頼できる人がたくさんいると思うんです。ですから、そういうふうに施設づくりに関係しているような、職員の方が逆にいえばおりてきて運営してくれると一番いい。我々の直接的な意見を組み入れて、そこで、例えば建物ができてしまってからでも、プログラム上で半分ぐらいは地域の活動を組み入れて、新たにプログラムを組むことができる、直接援助、支援してくれるというふうな体制の施設、どういう形態かよくわからないけれども、そういうふうに行政が直接おりてきて対等にやってくれる、というかかわりができればいいと思うんですね。

松本　市民と行政の共同作業みたいなのが無理なんでしょうかしらね。つくる過程でも、運営でも。私もきっと器だけつくって、全部任せてほしいといっても、不可能だと思うんです。行政も入って、市民も入って一緒にということがあるといいですね。

田代さん

田代　大きな公園の中に、子供たちが自由に遊びに来るログハウスがこれからできて来るのですが、地区センターと同様で、地元運営委員会のもとに、ログハウスボランティアがいて、我々は、研修プログラムをつくっているんです。ログハウスのボランティアさんが少しでも、みんなのニーズを調整して、吸い取ってくれればいいんじゃないかと思って。僕だったら、地域のたまり場にして、近所の人たちをみんな集めちゃう。老人も遊びに来るし、おばちゃんも遊びに来るし、子供も遊びに来る。見守る人がいるから、「ちょっとお使いに行ってくるから荷物を置いてくね」とか、「じゃあ、あそこで待ち合わせしようよ」とか、そういうふうなことに使って、だれもいない広場よりは、人がいて、小屋があれば、約束の場とか、待ち合わせの場とかにもなる。

加藤　結果的にはそういうものになると思うんですけれども、住民的な発想というものがどうも受け入れられていないんです。だから、ただ単にそういうものをボンと持ってきて、プログラムもあるし、利用しろと。

本間　地区センターのコミュニティ・ボランティアをしていて感じたのですが、器具ひとつにしても、あてがわれた形でくる。多分、どこのセンターにも同じものが配置されているのではないか、と思うのですが。

田代　あれは同じにしないと、住民から文句が出ちゃうんじゃないの。

加藤　文句が出たら、文句が出た方がいいと思う。

田代　施設もそれぞれ違っていていい、むしろ、違いを大事にするということと、もう一つは、住民の参加を考えた場合には、時間が必要なんですね。その時間が非常に短縮されている。住民の発想をきめ細かく聞いて、地域の実情に合わせていくためには、その辺が変わってこないと、開けてこないというか……。本間さんたちが自治会館を建設されたときも、相当年月をかけられたそうでね。

手づくりの会館建設

本間　私たちの自治会館建設の場合は、ほんとによく集まって話し合いをしたんです。集会室の床を何にするかで何回集まったかわからないぐらいに集まって、子供たちのためにはカーペットがいい、年寄りは、もしかしたら子供たちがおしっこしたら臭くなるからカーペットじゃない方がいいとか、ビニールがいいとか、いろいろな材質で、わいわいギャーギャーやって、結局、最後はお年寄りがここで体操とか何かをしてもいいように、コルクの床にしようということで、ちょっと割高になったんですけれども、そこに落ちついたんです。そこに至るまで、床一つとっても、ほんとにすごい話し合いができたんです。

田代　五年ぐらいかけたんですか。

本間　ええ。やっぱり一つの建物をつくるのには、そんなぜいたくなことは望めないかもしれませんけれども、残っていくものですし、これからも使っていくものなんですから。

松本　自分たちでつくれるのは、自分たちの思いとか意思とかが込められるし、柔軟に使えるし、自由だし、心がこもっているというか、公のものというのは、不自由で、制約が多くてということで、きっと敬遠されてきていたと思うんですけれども。

それと、行政のやることは管轄がばらばらで、生活者というのはもっと総合的というのかな、いろいろな面を持って生活しているのに、その辺のことを行政の人たちが、もう一度見直してほしいなと思うんですね。……

自主活動のバックアップを

田代　僕は地区センターは、住民の自治活動を保証する場所で、自分の意思で自分で決定してやっていくのだというようなことを考えていると、いままでの手法でいいのかなと思う。

松本　行政は住民の自治能力とか、そういうことをもっと信用してほしい。

加藤　自由意思の地域活動を、膨らますためには、場所も必要だし、人的なメンバーも必要だろうし、いろいろな情報も必要だし、中には活動資金が必要なものもあるかもしれない。ですから、個人または会が要求すれば、ある程度の線までは行政がバックアップするような体制があると、非常にありがたいと思います。

田代　例えば万が一事故があった場合に、あなたの負担としてできない事故のときには、保険金を役所で出してあげるよとか。

加藤　実際は今、松本さんがおっしゃられるようにもっと信用して、ある程度のスケールを持ったプログラムを、応援してほしい。どこをどういうふうにスケールを持つかというのが今後の課題だと思いますが、住民自治や地域福祉にもかかわるような問題で、直接住民の意思に基づいた活動で、長期に継続していくような見込みとかが認められたら、直接住民が援助を要求できるような窓口があれば、非常にやりやすいと思います。

田代　みんなが集まってきて住民が行政の施策に対する要望書ぐらい出せるくらいな、そういう窓口がほしい、と。

加藤　実際にそれを受けて、実にならなければ要求しても意味がないと思う。直接行政担当者ないしは市長レベルに届くホットラインがどこかにあっていいと思う。

田代　どこかが、発信基地にはなり得なければいけないでしょうね。

四――ふところの深い地域を

松本　「ボランティアみたいな、そういうのはどんどんやってください。でも、お金とかは出しません」とい

後谷自治会館の庭の踏石の平板づくり

うことなんですね。結局は自分たちの地域がよくなることが自分たちに返ってくる。障害児を締め出さない、お年寄りを施設に送り出さないような、そういう地域をつくりたいからやっているんですけど。

田代　もう一歩進みたいというのは、施設が欲しいですか。

松本　今はいろいろな活動の人的なネットワークもできているけれども、私たちの世代だけではなくて、より長く続いてほしいし、よりもっとつながってほしいし、より、だれでもが参加できるものになってほしい、よりいいという意味で拠点ができると、もっと活動が可能になっていくだろうと思います。

田代　活動の実践から出てきたその考え方をくんでくれるようなセンターが欲しいということですね。

松本　ええ。

田代　川向さん、一歩前進の先の見通しはどうですか。

川向　皆さんの話を聞いていて非常に皆さん整理されているな、と思うのですが、いろいろなものがたくさんあって、いろいろな人が利用できて、選べて、それがいいですよね。

田代　選べるということがね。

川向　それと、私のイメージなんだけれども、確かに行政がつくっていく、そういう場もあるんだけれども、そういう健康的なものだけではなくて、もっと不健康なものがあったり、いけないものがあったり、ひょっとすると犯罪に近いんじゃないかというものがあったり、そんなものがいっぱい混在していいんじゃないかと思うんです。建物が地域じゃないですから。地域というのは、個人でしか広がっていかないのだけれども、もっと嫌らしい部分もいい部分も、それからおもしろい部分も、おもしろくない部分も、先ほど僕はだれもが受け入れられて、排除されないと。私は仕事としてそれをつくっているのですが。

松本　薄暗いところがあって……

川向　そうそう。

松本　私は具体的には今、身近にいる中退した子とか、登校拒否の子とかが家に閉じこもらずに、地域から出ていかずに、自転車屋のそばにしゃがんで毎日たむろしているとか、それも一つのたまり場だと思ってます。コミュニティセンターというのは近代的で、白くてという感じがしますけれども、そういう子が地域から締め出されない、自然にたまれるような……。

川向　例えば十八歳にならないとたばこを吸えないけれども、あそこのコミュニティセンターは吸えるとかね。（笑）

松本　夜じゅう飲むべえ、とかいうのも可能ですか。例えば、今、これからできる施設で、若者は今、夜じゅう起きているんですね。だから、九時で閉館ではなくて、泊まれるとか、火を使えるとか、そういう場所がないんです。

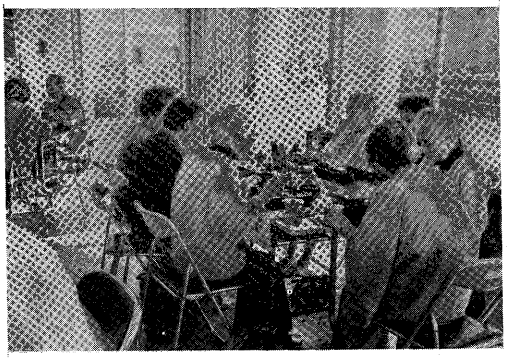
田代　家出したら、そこへ泊めてくれるとかね。

松本　中学生なんかでも、そういうことにすごく飢えているんですね。すぎの子の園庭で煮炊きをして、夜そこの部屋に泊まったり、そういうことができたんですね。今は集会場になってできなくなったんですけれどもね。

本間　地区センターにも、変な髪型をして、たばこを吸っている子たちが来たときにも、私なんかも実はおっかなくなっちゃうんですよね。どういうふうに対応していいかわからない。受け入れる人間が必要なんですよね。

松本　たとえば、シンナーすっている子も、どんな子もそこでほっとできて、人間性を回復していけるような、締め出すだけでは何にも解決にならないですから、そこでほっとし

ドリームハイツの地域給食の会



ながら、自分を取り戻していけるような場になるためには、やっぱり人ですね。

田代　今、ボランティアという名前で施設に張りついている人たちにも、研修が行われて、我々が話し合っていることも仲間に入って聞いてくれたりしていたら、ドアをがっちり締めてかぎをかけたのをかけないでおいておこうとか、ちょっと隙間をあけておこうという気持ちにならないだろうか。研修というのは、今、ゼロなんです。

加藤　老人とか、障害者だとか、子供も含めてですけれども、いろいろ適応できなくなっている人たちというのを、松本さんがいわれたように、許容力のある方、むしろ昔、自分が苦労した人たちの方がすごく効くね。そういう人たちにボンとげたを預けて、もしそういう責任を持ってやってくれる人がいたら、場の提供と援助をどんどんしてあげるとよろしいですね。

本間　一本の線に全部つながっていると思うんです。私も、施設のボランティアをしていて、ああ、この子は、ほんとは精神系の方がいいんじゃないかなというような子もいるけれども、その子をじいっと見ていると、私にもし我慢とか何かの抑制がなくなったら、その辺まで行くだろうなとか思うんです。全部一本の線に赤ちゃんから老後までつながっているんだなと、私はいつも思っていますから。だから、人間がつくっていくものは大きいなと思うし、そういう存在をどこがピックアップしていくのかなと、いつも思っています。

加藤　でも、こういうふうな対象がいるからこういうのをつくると、そういうものではなくて、そういう根を出さないというか、うまく地域で育てていく環境というのをどういうふうにつくっていくかという、そういうものは随分必要じゃないかなと思います。

松本　いつも健康で元気があっていい子の時期ではなくて、いろいろな時期を人間て越していきますよね。体が病気になったり、心の病を持ったりとか、そういう意味をすべて含めて育ち合っていけるような、そういうことも認めながら、含みながら、育っていければ、そういう子に柔らかい地域にしていきたいと思っています。今はすぎの子のおやじの会たちも、よその子も自分の子も一緒くたに面倒を見ていますけれどもね。一朝一夕にはなかなかそういう地域はできないし、そういう地域にしたいという人が、何人も何十人もいるということは、自分もその地域に住み続けたいし、出ていっちゃうんじゃなくて、できるだけ、そこに住み続けたいと思う人が多いような地域にしたいなと思っているんですね。

田代　そこですね、死ぬまでここにいるという人たちが引っ張っている。何でも口出すというか、何でもやっちゃう、行動しちゃおうと。そのエネルギーを大事にしたいですね。

今日はどうもありがとうございました。